

# 地域における自律型まちづくりの 促進に関する一考察

久 隆浩<sup>1</sup>

<sup>1</sup>正会員 近畿大学教授 総合社会学部環境系専攻(〒577-8502 大阪府東大阪市小若江3-4-1)

E-mail: hisa@socio.kindai.ac.jp

本研究では、住民自らが自発的・自律的に取り組む地域における自律型まちづくりを対象とし、それが求められる時代背景と社会的意義について考察するとともに、自律型まちづくりを促進するためのしくみについて検討を行う。自律型まちづくりが求められるようになったのは、近代からポスト近代への時代の転換と軌を一にする。ハバーマスが指摘するように、近代は経済システムと国家・行政システムによって成り立ってきた。しかし、これからは自発性から生まれるボランタリーな領域が重要となってくる。自発性・自律性を前提とした活動は持続的であり、これを促進するためには、ヒエラルキー組織ではなくネットワーク活動が、そして、キーパーソンの性格としてはリーダーではなくファシリテーターが重要である。

**Key Words:** *autonomy, voluntary, community planning, networking, post modern*

## 1. はじめに

今日、日本に限らず世界中で住民主体の自律型まちづくりが展開されている。これは単なるブームではなく、来るべきポスト近代社会に呼応した動きと捉えることができる。本研究では、自律型まちづくりが求められる時代背景、社会的背景を考察するとともに、個々人の自律を促すためのしくみについて検討を行う。

## 2. ボランティア活動の現代的意義

阪神淡路大震災が起こった1995年を「ボランティア元年」と呼ぶ。震災の復旧・復興に多くのボランティアが駆けつけ、活動を展開した。それから17年、2012年の東日本大震災のときにも、当然のように多くのボランティアが関わってくれた。どうして今、こうしたボランティア活動が活発になっているのか。その社会的意味について考えてみたい。

### (1) 生活世界とシステム

ハバーマス<sup>1)</sup>は、現代社会を「生活世界」と「システム」の二層構造として捉えて説明している。私たちは他

者との軋轢のなかで暮らしている。そこで、本来は自らが当事者として調整を図らなければならないリスクや苦悩を軽減し、合理的に生きていくために、貨幣をメディアとするシステム(経済システム)と、権力メディアによって制御されるシステム(国家・行政システム)を生み出した。彼はこれを「生活世界の技術化」と呼んでいる。

そして、このシステム領域が拡大することでシステム自身の基盤であったはずの生活世界のコミュニケーション的行為を圧迫するようになり、「システム合理性による生活世界の植民地化」が起こる。ハバーマスは、こうした状況を乗り越えるためには、「私的領域と公共性のそれぞれにあるコミュニケーション的構造をとった行為領域を、経済および行政の行為システムがもつ独自の力学、物象化から防衛する、自由の制度を構築すること」、そして「専門家文化と貧しくなった日常実践との連続を取り戻すこと」が必要である、と指摘する。これは、専門家がリードする行政主導、経済主導の都市計画から、住民自らが当事者となって行う住民主体のまちづくりへの転換と軌を一にするものである。

### (2) コミュニケーション領域の拡大

ハバーマスが述べているように、システムの領域が拡

表-1 社会行動の3領域

行動領域	行動媒体	行動規範
経済領域	貨幣・市場	功利性
国家・行政領域	権力	公共性
ボランティア領域	個々人の自発性	共感・関与

大しすぎ私たちのコミュニケーション領域を侵している状況を改善し、そして、貧しくなった日常実践と専門家文化の連続を再びむすびつけていくためにも、私たち自身が主体的に関わり自律的に行動する部分を増やしていくことが大切だといえる。自由で対等な市民一人ひとりが当事者となって対話を行い、それを通じて自律的に秩序を形成することが求められる。

こうした状況を伊藤<sup>2)</sup>は次のように説明している。

「現在の社会の基本的な部分は、法であれ、規則であれ、貨幣であれ、われわれ一人ひとりが個性ある主体として相互に交渉しあう苦悩とリスクを軽減するさまざまな制度的媒体によって制御されている。」「しかし、現代は、もはやそうした制度に依拠して効率的に物ごとを推し進めることを許さない。一人ひとりがリスクを背負い、苦悩に耐えながら、自己と同様に個性ある他者とコミュニケーションすることが求められる時代なのである。」

伊藤も言うように、当事者として問題解決に関わっていくにはリスクもあり苦悩も多い。しかし、一人ひとりがそれを回避することなく立ち向かっていってこそ、主体性ある市民が基盤となった新しい社会がつくられるのである。こうした先駆けは、オランダを中心に広まっている shared space(共有空間)であろう。オランダ人の交通専門家ハンス・モンデルマンが考案したこの手法は、道路から信号や標識等を撤去することで自動車の運転手や歩行者の注意力を高め、交通安全を実現しようとするものである。行政は制度運用を放棄し、当事者同士のコミュニケーションによって問題解決を図る、そうしたしくみとして捉えることができる。

### (3) ボランティア領域

ハバーマスが近代の特徴としてあげた「国家・行政システム」「経済システム」による生活世界の技術化という観点を引用しながら、今後求められる「ボランティア領域」を付け加え、それぞれが用いる「行動媒体」と「行動規範」を整理すると表-1のようになる。ここで行動規範に「共感と関与」と記しているのは経済学者のセン<sup>3)</sup>の考え方を借用したものである。経済学の分野では、経済活動において自己利益のみに従って行動する完全に合理的な存在を経済人あるいはホモ・エコノミクス(homo economicus)と呼ぶ。これに対しセンは、人は功利

的にのみ行動せず共感(sympathy)と関与(commitment)が重要であると述べている。

表-1 にしたがって従来の近代都市計画を考えれば、行政が主に担ってきた「国家・行政領域」と民間事業者が主に担ってきた「経済領域」で動かしてきたと考えられる。また、大きな政府か小さな政府かという議論は、「国家・行政領域」を拡大しようというのが「大きな政府」論、「経済領域」を拡大しようというのが「小さな政府」論ということができる。

しかしながら、いずれにせよシステムに依存しようとする点では同様であり、これからはシステムに依存せず自らが当事者となって責任を引き受けていく体制づくりが必要であり、それが「ボランティア領域」と捉えることができる。今後は、第3の領域としての「ボランティア領域」の充実を図り、経済領域と国家・行政領域との役割分担や連携を行っていくことが重要である。

## 3. 自律を促進するしくみ

### (1) 交流の場と自律性

まちづくりのネットワーク形成の契機として、筆者は関西を中心に各地で地域における「交流の場」を設置、開催している。<sup>4)</sup>これは小学校区を基本単位として、月に1回程度の定例会を催し、情報交換を図るものである。交流の場では自発的な参加を重視し、参加できる人が参加できるときに参加するオープンな場所としている。また、話題もみんなを持ち寄ることが原則である。「まちづくり井戸端会議」という名称で呼んでいるところが多いが、まさに井戸端会議のように、場に集まった人が合意形成を目的としない自由な情報交換を図っている。

ここからいろいろな取組やネットワークが生まれているが、その鍵は参加者の主体性の高さにある。主体性の高い参加者が集まっているからこそ、いろいろなものが生まれてくる。

ネットワークの特徴を考えるには、情報通信システムにおけるネットワークをイメージすればわかりやすい。そもそも社会システムの自律分散型への変化を促進させているのはインターネットの普及である。自律分散システムとは「全体を統合する中枢機能を持たず、自律的に行動する各要素の相互作用によって全体として機能する

表-2 ネットワーク活動の諸性格

	ネットワーク活動	ヒエラルキー組織
中枢性格	自律性 目的・価値の共有・共感 分権性	他律性 与えられた目的 集権性
周辺性格	オープン性 メンバーの重複性 余裕・冗長性	クローズド／オープン性 メンバーの固定性 効率性

システムのこと」<sup>5)</sup>であり、「集中管理システムの対置語」である。自律分散システムの実現には、システムを構成する各要素の自律性が重要となる。もともとメインフレームと呼ばれる大型コンピュータを用いた集中管理システムであったものが、パソコンの能力向上によって自律分散システムへと移行していった。

これを比喩として人間社会の自律分散システムを考えると、コンピュータと同様に各要素、つまり一人ひとりの人間の自律性が重要となるということである。

## (2) 自律性を促す

現在、組織経営論の分野でも「自律型人材」が注目されている。HRD研究所<sup>6)</sup>が実施している「人材開発に関する調査」によると、各企業のトップが「自社の求める人材像に当てはまる」と考えられる項目を7つまで回答した結果で、1990年から1997年までの7年間で最も回答率が増加した項目は「自律的に仕事をすすめられる人」であり、1990年に22.7%であったものが1997年には43.8%となっている。これは社会や産業界の変化に対応したものと捉えられる。大量消費時代から価値観多様化の時代へ、そして量から質へと変化していくにつれて、価値の創造が企業経営にとって重要になってきた。それを支える人材として「自律型人材」が求められるようになったということである。

ではどのようにして個々人の自律性を高めていけばいいのだろうか。これについて、ピンク<sup>7)</sup>は『モチベーション 3.0』を著している。行動を促す動機(モチベーション)をモチベーション 1.0、モチベーション 2.0、モチベーション 3.0 の3種類に整理しているが、モチベーション 1.0は生存本能にもとづく動機、モチベーション 2.0は賞罰(アメとムチ)による動機、モチベーション 3.0は自律性にもとづく動機である。ピンクの整理によるまでもなく社会心理学の分野の動機付け理論では、外発的動機付け、内発的動機付けがあり、内発的動機付けのほうが持続することが明らかとなっている。

ピンクはモチベーション 3.0をもたらし要素として、「自律性」「上達感」「目的」を挙げている。端的に言えば、明確な目的を持って上達をめざし自律的に行動す

ることと言える。また、自律性を高めるには行動が自発的にできることが重要であると彼は述べている。

## (3) ネットワーク活動とヒエラルキー組織

つぎに、構成員の自発性、自律性を高める組織のあり方についてみていきたい。朴<sup>8)</sup>は『ネットワーク組織論』のなかで、階層(ヒエラルキー)組織とネットワーク活動の特徴を表-2のように整理している。

まず、ネットワーク活動がネットワークたるべき基本的な性格として「自律性」「目的・価値の共有・共感

「分権性」の3つを挙げている。第一に、構成員全員が自律的に振る舞うことができること。第二に、目的・価値を共有、共感している人々が自主的に関わっていること。そして、第三に、上下関係のない水平な構造を持ち、分権化を指向するシステムであること。

これらは、次のような副次的な性格を要求する。まず第一に、ネットワークが創造的になるためには、誰もがいつでも参加したり脱退できる「オープン性」を備えていること。第二に、ネットワークの硬直化を防ぐために、メンバーはいろいろなネットワークに重複して参加していること。そして、第三に、さまざまな価値観や考え方を許容するために、余裕、言い換えれば冗長性を持っていること、である。

これに対し、階層(ヒエラルキー)組織では、「効率性」・合理性を追求するがゆえに、上層にいる一部の人間が「集権」的に意志決定を行い、それを命令というかたちで下に下ろす。そして、多くの構成員は「与えられた目的」に向かって「他律」的に行動するのである。

ピンクのモチベーション論に照らし合わせて考えれば、与えられた目的で動く階層組織よりも、自律的に動けるネットワーク活動のほうが、やる気を引き出しやすいといえる。じつは、若年層を中心に組織離れが起きているのは、ヒエラルキー組織に対する拒否感覚からであり、自らが自発的、自律的に関わることができるネットワークには積極的に関わろうとしていると捉えることもできる。

#### (4) ファシリテーターとリーダー

続いて、活動の核となるメンバーのあり方について考えてみたい。

従来、まちづくりには有能なリーダーが必要であると言われてきた。たしかにリーダーの存在によって導かれたまちづくりは少なくない。しかし、リーダー先導型の活動は、リーダーに依存する部分が強く、リーダーが替わったり、いなくなると、たちまち活動が滞ることも少なくなかった。一方、ネットワーク活動は自律的によって動くものである。ここで必要なのはファシリテーターであろう。ファシリテーター(facilitator)は、人をその気にさせる人、みんなが主体的に取り組む場や雰囲気をつくる人、のことである。

ファシリテーターはファシリテーションを行う人であるが、ファシリテーションは「会議やワークショップにおいて参加者の主体性を育み、コミュニケーションを活性化させ、多様な意見の交換の中から新たな発見や可能性、アイデアを見出すことを促し、個々の知恵を創造的な成果に結び付けていくことを支援する。自律分散協調型(ネットワーク型)の組織において重視される手法で、ビジネスや社会活動などの分野で取り入れられている。」<sup>9)</sup>ここでも示されているように、ファシリテーションは自律分散協調型の組織や活動に不可欠な技法であるといえる。

#### 4. 交流の場を通じた自律性向上

以上の考察をまとめると次のようなことが言える。来るべきポスト近代社会では、従来の「経済領域」「国家・行政領域」に加え「ボランタリー領域」を位置づける必要がある。この「ボランタリー領域」は名前のとおり「自発性」による活動が「共感」によってつながっていくものである。また、こうした自発的・自律的な活動を促進するためには、活動形態ではヒエラルキー組織でなくネットワーク活動が、そして、キーパーソンの性格としてはリーダーではなくファシリテーターが重要である。

こうした内容から近年行われているまちづくりワークショップをみたときに、参加者の自発性・自律性を活か

し切れていないものがあるのが気になる。主催者が固定的なプログラムを押しつけてくるもの、すでに話の流れや結論が決まっておりにそれに誘導されるもの、ファシリテーターが自らの主張をしてしまうもの、などがこれに相当する。朴は協働について「啓蒙的な協働・操作的な協働」と「自発的な協働」に分類し、前者は「他者管理システム」、後者は「自己管理システム」としているが、本来は啓蒙的あるいは操作的な協働は存在しない。啓蒙や操作を行うことによって、自発性を阻害するといえる。本来、ワークショップは白紙の状態から参加者が情報交換を行い、自発的に進めていくものである。また、その支援をするのがファシリテーターの役割である。

課題が明確でその解決策を検討していくワークショップはなかなか自発的になりにくいかもしれない。それにくらべ地域における交流の場は、参加者一人ひとりの自発性・自律性を前提としており、自律性の高い者どうしが情報交換を通して共有・共感した者がつながっていく場や機会となっている。今後こうした場づくりを各地で展開していくことで、市民の自律性を高め、ネットワークをより充実していくことが、ポスト近代社会の実現では重要だといえる。

#### 参考文献

- 1) Habermas, J., *Theorie des kommunikativen Handelns*, Suhrkamp Verlag, 1981. (邦訳『コミュニケーション的行為の理論』)
- 2) 伊藤守：情報からコミュニケーションへの視座転換，情報社会とコミュニケーション，福村出版，1995.
- 3) Sen, Amartya K., *Rational Fools -A Critique of the Behavioral Foundations of Economic Theory, Philosophy and Public Affairs*, Vol. 6, No. 4, 1977.
- 4) 久 隆浩：地域における交流の場づくりを通じた合意形成の意味と必要性に関する考察，第29回土木計画学研究発表会講演集，2004.
- 5) 朝日新聞社：知恵蔵2012, 2012.
- 6) HRD研究所：人材開発に関する調査, 1990, 1997.
- 7) Pink, D. H., *Drive: The Surprising Truth About What Motivates Us*, 2009. (邦訳『モチベーション3.0』)
- 8) 朴容寛：ネットワーク組織論，ミネルヴァ書房，2003.
- 9) 三省堂：デイリー新語辞典

## A STUDY ON THE PROMOTION OF AUTONOMOUS COMMUNITY PLANNING

Takahiro HISA